

幸せな最期のために

(原文は英語)

プリンス・ビショゴ・バシャンゲジ (20 歳)

コンゴ民主共和国<エスワティニ在住>

南部アフリカ・ユナイテッド・ワールド大学ウォーターフォード・カマラバ校

私たちが「普通ではない」生き方を避ける限り、この地球上で本当に生きたことにはならないだろう。呼吸やあらゆる生命プロセスも虚しいままだろう。それは、生物学上の生命に加えて、真の意味での生命を全うするという大仕事をやり遂げない生き方である。

生きることは、目標を持つことだ。目標は、生命に生きる価値を与えてくれる。この世における価値の創造を実現してくれる。目標は、人生を導くコンパスだ。人間は誰も、死ぬまでの間に、生まれてきた世界をより良いものに変えていく責務を担っている。もし今日、すべての人が必ずしもその責務を果たしていないのであれば、その原因は、目標をもって生きておらず、本当の意味で生きていないからだ。彼らは、生まれ、成長し、地球の資源を使い、「人生を謳歌」し、死ぬ。これは生きていることにはならない。ただ危害を加えているだけだ。目標を持って生きることで、闘うべきもの、命をかけられるものを得ることができる。許せない問題や欠陥が明確になる。母なる地球をより良くするために大きな力がほしいと思わせるもの、それが生きることである。

私個人としてはいつも、この地球上で神聖な責務を担っていると感じている。その責務とは、この世界が私にもたらしてくれるものを消費するだけではない。この世界をより良くするために寄与することも私の責務だ。もし何の遺産も残すことなく死ぬことになれば、私は深く後悔するだろう。それでは生きたことにはならないからだ。この世界に危害を加えるためだけに生まれてきたことになる。地球上で費やした時間とそこに存在していたことを悔やむにちがいない。なぜなら、私自身の神聖な責務を全うしていないからだ。

2015 年、民族紛争で家族全員を失ったことは、私が生き続ける理由を失うことにつながった。家族は、私にとって生きるための原動力であり、幸せの源だったからだ。私は生き続けなければならなかった——意義を持って。そこで、毎日を明るく照らしてくれるものは何か、生き続けなければならぬと感じさせてくれるものは何かを振り返ってみた。それは、大小を問わず誰かの助けとなることだった。私は、自分の人生に意義を見出した。有意義な人生を送るということは、なにも幸せであることばかりではない。幸せかどうかは、自分がどれだけのものを持ち、手に入れるかによって決まることが多い。必死になって幸せを手に入れようとする一見魅力的なこの一連の過程は、たいていの場合、自分たちやそれ以外の生命に悪影響を及ぼす。有意義な人生とは、むしろ、自分が誰かにどれだけのものを与

え、もたらすかということではないか。私は悟ることで、その意義を見出した。

さらに、人生の意義は帰属意識を持つことによっても得られることに気づいた。人や自然との繋がりがそうだ。この帰属意識はこれまで、家族の中だけに見出されてきた。もっと何か大きなものから得たものではないので、簡単に失いやすい。誰かと繋がるということは、その人を感じるからだ。自然と繋がるということも、それを感じ、それまで見逃されてきた自然の持つ力を知り、生かすことだ。聖典の間違った解釈によって、私たちが豊かな自然の一部であると考えることが禁じられてきた。その結果、自然と繋がるためのあらゆる慣習を、私たちは聖者にあるまじき行為と呼んでいる。そして、人間として私たちが肉体的・精神的な潜在能力を十分に開花させて生きるために母なる大地が与えてくれる力とエネルギーを、否定するよう強要されてきた。私たちは活力を奪われている。

私たちは今、自分たちの生命の安全を脆弱させ、生活水準を後退させる、破滅的で組織的な抑圧が蔓延した社会で生きている。地球上の生命を思いやり、より良くしていくためには、何よりもまず自分自身のアイデンティティ、強さと弱さ、価値を知らなければならない。自分自身を理解していなければ、他の誰かに影響を与えることなど決してできない。その次に、私は自分のコミュニティを理解することに努めたい。これは主に、技能や才能といった目には見えない財産、資源、問題事項を理解することだ。

居心地の良い領域から抜け出して変化を起こすこと、周囲に影響を与える生き方をするために自身に秘められた能力を十分に探求することは、私たちの世代のスローガンになっている。しかし、実際にこれを達成するのは僅かな人たちだ。人の権利を奪うこれまで通りの生き方（学校、就職、そして、あるいは起業）と違う生き方を追求する者はほとんどいない。学校で決められた教育課程にはないことを学ぼうとする者はほとんどいない。見ることを禁じられているものを見ようとし、聞くことを禁じられているものを聞こうとする者はほとんどいない。学校教育を終えても学び続ける者はほとんどいない。仮に教育課程が存在しなければ何を学びたいかを考え、それを学ぶことに魅力を見出そうとする者はほとんどいない。生きることの魅力とは、従来のはとはとらわれない、主流派とは言えない生き方にあるのだ。